

近代の国づくり（1867～1900） その3

《横浜木樋水道と、添田知通の活躍》

横浜の外国人居留地周辺一帯は、井戸水に塩分が混じり飲用に適さず、船で水を運んでいました。そこで神奈川県は、鉄道工事が着手された1870年（明治3）、川崎の二ヶ領用水の上流（久地地点）から取水して導水する水道計画を立てます。

計画を知った添田知通（ともみち：二ヶ領用水組合のトップ、注1）は、翌1871年（明治4）、取水地点を二ヶ領用水の下流（鹿島田地点）に替え、用水の維持管理費の3分の2を横浜に肩代わりさせる対案を出します。

結局、この案が採択となって、設立された「横浜水道会社」により工事が進められ、2年後の1873年（明治6）に通水。鹿島田から横浜までの約12kmは、60cm四方の木製の導水管（木樋）を埋設し、そこから市内各所に小さな木樋で排水しました。

「横浜水道会社」は、生糸輸出で蓄積された商人らの出資により作られたものですが、工事費が予定より超過したうえ、木樋が粗造で漏水が多く、半年で経営難に陥って横浜町会所（注2）に引き取られます。その後の維持管理に苦勞し、近代水道敷設への動きが活性化していきました。（注3）

一方、1873年（明治6）から地租改正が始まります。知通は、神奈川県官吏に登用され、地租改正事業の中心を担っていきます。しかし地租改正は評判が悪く、反対一揆や地租軽減運動が起こります。当時神奈川であった多摩地域では、地租軽減に加え、国会開設、憲法制定を求める自由民権運動が熱狂的に燃え上がります。

注1：添田知通は、当時41歳で、二ヶ領用水大総代でした。19歳のとき、武州橘樹郡の名主となり、24歳で川崎宿38ヶ村寄場組合のトップとなります。寄場組合とは、1827年（文政10）に関東に設置された警察組織です。そして、ペリーの再来時を日記に記録しています。また、鉄道敷設の折には、多摩川の砂利が使われたため、その砂利採取場の取り締まりも行っています。

注2：横浜町会所は、横浜開港の当時、貿易商人が営業上の公共の事件を評議するために設立されたもの。貿易商が負担金を出して運営されていました。1874年（明治7）には石造の洋館が建設され、現在は、その跡地に横浜開港記念会館が立っています。

注3：1887年（明治20）、神奈川県は、イギリス人技師パーマーに設計・監督を依頼し、相模川を水源とする日本初の近代水道である横浜水道を完成させます。（水土の豆知識89にて紹介）横浜水道は、1890年（明治23）に水道条例が制定され、水道事業は市町村が経営することとなり、横浜市に移管されました。

写真は、①二ヶ領用水と横浜水道の取水地点（第5回里川文化塾二ヶ領用水フィールドワークHP掲載図に細見加筆）、②添田知通寿徳碑（京急鶴見市場駅近くの熊の神社内に建立、細見撮影）

